



7 医療班による救助犬の応急手当

優れた嗅覚を生かして、生存者を探す救助犬。しかし、災害現場は足場が悪く、けがをしてしまうこともある。そんなときは、医療班（医師・看護師）の番。医療班は、隊員の健康管理・手当を行うだけでなく、救助犬にも対応する。手近にある物で応急手当をし、傷をなめないようにエリザベスカラーを作る。ダンボールを活用したり、肌を守るためにタオルを巻いたり、工夫をこらす。



6 機材のメンテナンス

現地での活動には、日本から持ち込んだ機材を使う。日々の活動の後には、機材を整備し、しっかり使える状況に戻すことも必要だ。ここではコンクリート切断に使うダブルブレードカッターを分解し、ベルトの調整をして再度組み立て、試運転するまでの練習が行われた。



5 ロープワーク

救助された人を高所から地上に下ろし、治療できるまで搬送するために必要なのがロープを使った作業だ。安全に、迅速に下ろすだけでなく足を下にし、あまり揺らさないように配慮することで、少しでも救助された人が楽に下りられるように配慮している。しっかりと声を掛け合い、全員が力を合わせて動く。

救助チームの技術訓練に密着！



1 初動活動

人命救助はスピードが重要。災害が発生したらできるだけ迅速に現地入りし、活動を開始する必要がある。技術訓練では、被災国の災害現場に到着したときに必ず実施する、情報収集、有毒ガスなど危険物の有無や建物の倒壊危険性の確認（構造評価）、声掛けや救助犬、機材を活用した捜索を実施した。



三角幸子JICA国際緊急援助隊事務局長による開講あいさつ

2 ショアリング

地震などで形がゆがみ、倒壊の可能性がある建物。でも、中に生存者がいれば救助が必要だ。そこで、安全に救助活動が進められるよう、木材などで作った支柱で建物を一時的に支える。現場で建物に合わせて支柱を作成し、建物内に固定。緑のベストを着ているのは、被災地で建物の安全性を判断する構造評価専門家だ。



3 ブリーチング

倒壊した建物の中から人を救出するために、コンクリートに穴を開ける。いきなり大きな穴を開けると、落下した破片が中にいる人に当たってしまうかもしれない。ドリルやカッター、ハンマーなどを使って、細心の注意を払いながら、救助隊員が生存者を搬出できる大きさの穴を開ける。



4 リフティング／クリビング

がれきを持ち上げ、救助に必要な隙間を作る。国内災害ではクレーンなどの大型重機を使ってがれきを釣り上げることも多いが、海外の被災地に駆け付けるときには大きな機材は持ち込めない。足踏み式のジャッキを使い、木材ががれきの下に差し込んで、地道に持ち上げていく。



8 “裏方”の訓練も

救助隊員が最前線で活動するためには、業務調整員の活動が欠かせない。資機材の管理総括、食料や燃料、輸送、通訳などの手配を行い、スムーズな救援活動の環境づくりに尽力するだけでなく、国際機関との調整も行う心強い裏方だ。技術訓練ではテントの設営、衛星電話の設置などを実施。救助犬のハンドラーからは犬の取り扱い、医療班からは衛生管理面でのアドバイスを受けたほか、チーム活動拠点の設営についてワークショップを行った。

命を救う技術を磨く

一度災害が起きたら、救助活動は時間との戦いだ。全国のさまざまな組織から隊員が集まる国際緊急援助隊では、普段の活動とは異なる環境で、いつもと違うメンバーと協力して救助をスムーズに進めるため、年1回、技術訓練を行っている。

参加者に聞く

「救助という面では、私たち消防隊は日頃から経験を積んでいます。しかし、国際緊急援助隊で行うのは大規模災害の活動ですから、都市型災害からの救助が中心の普段の活動とはすべきことが変わってきます。また、普段、自分たちが使っている機材とは異なるものを使っている場合もあるもので、そうした機材に慣れることも重要な経験です」と話してくれたのは、横浜市消防局特別高度救助部隊（スーパーレンジャー）の河野宏紀統括部隊長だ。「最近では、国内災害でも他の機関と協力して救助活動に当たることが重要になっています。他部隊との連携の地下づくりとともに、ここで他の部隊から学んだことを普段の業務に生かしていきたいと思っています」

警視庁特殊救助隊の道本将太郎さんは「私たちは常日頃、交通事故から山の滑落、水難事故などまで、幅広い救助活動に取り組んでいます。警視庁特殊救助隊は発足して5年目となりますので、もともと災害対策を充実させていきたいです」と語る。

今回の技術訓練では消防隊員や海上保安庁隊員らと合同訓練を経験した道本さん。災害現場に対する細かな目配りや、幅広い視野での危険物検知など、他の省庁から学ぶことは多いという。「これまで、海外に派遣されたことはありませんが、熊本地震など国内の災害救助に出勤しています。現場では、わずかな違和感を見逃さないことがスムーズな救助活動につながると思います」

海上保安庁第三管区海上保安本部の宮地龍啓副隊長は、消防で救急隊の研修を受けた経験があることから、各組織の文化の違いを良く知っている。「私たち海上保安庁の隊員は、普段は海上を中心に活動しているのですが、国内でも海外でも活動に違いはありません。逆に、陸上での救助で重要な建物のブリーチングなどはなかなか経験することができないので、ここで新たに学んだ技術や周りの意見交換の成果を当庁に持ち帰って、仲間と共有します」と話した。

全員が声をそろえて指摘したのが、それぞれの組織が違う強みを持っているということ。三本の知恵の矢を束ねれば、より多くの人に救助の手が届くはずだ。